

「活動報（平成十三年）」

一、戦史関連研究会

◇戦史研究発表会◇

七月四日

研究発表

「日本陸軍の中国向け武器輸出と対中政策について

——『帝國中華民國兵器同盟策』を中心として——

戦史部第二戦史研究室所員 横山久幸

「海上輸送力の戦い——比較戦争経済史の視点から——」

戦史部第二戦史研究室所員 荒川憲一

「インドシナ残留日本兵の研究」

戦史部第一戦史研究室主任研究官 立川京一

特別講演

「軍事史研究について考える」

政策研究大学院大学教授 伊藤 隆

ワルシャワ大学教授

エヴァ・ルトコフスカ

「日露戦争一〇〇周年をめぐつて」

エヴァ・ルトコフスカ

◇客員所員研究会◇
△戦争・戦略研究会▽

一月二十六日

「日露戦争をめぐるポーランド・日本協力関係」

ワルシャワ大学教授 エヴァ・ルトコフスカ

コメント

名城大学教授 稲葉千晴

一月二十九日

「第二次世界大戦をめぐるポーランド・日本両国関係」

ワルシャワ大学教授 エヴァ・ルトコフスカ

コメント

外務省外交史料館 白石仁章

一月三十日

「日露戦争一〇〇周年をめぐつて」

ワルシャワ大学教授

エヴァ・ルトコフスカ

△戦争・戦略研究会▽

二月二十三日

「クラウゼヴィッツと現代戦略思想の危機」

ロンドン大学教授 ジャン・ヴィレン・ホーニッヒ

コメント

戦史部第二戦史研究室所員 荒川憲一

二月二十六日

「中世ヨーロッパの戦争」

——なぜ歴史に残る軍人がいないのか——

ロンドン大学教授 ジャン・ヴィレン・ホーニッヒ

コメント

第一研究部第一研究室長 長尾雄一郎

二月二十七日

「ヨーロッパ中世戦略思想史——作戦戦闘史——」

ロンドン大学教授 ジャン・ヴィレン・ホーニッヒ

コメント

戦史部第一戦史研究室主任研究官 立川京一

△日独比較戦史研究会▽

三月一日

「第二次世界大戦の研究状況——独ソ戦を中心として——」

ドイツ国防省軍事史研究所長 ヨルグ・ドゥップラー

戦史部主任研究官 山村

健

三月二日

「日独両国における戦史研究の諸問題」

ドイツ国防省軍事史研究所長 ヨルグ・ドゥップラー

三月五日

「ドイツ海軍史——一八四八～二〇〇〇年——」

ドイツ国防省軍事史研究所長 ヨルグ・ドゥップラー

△日韓比較戦史研究会▽

三月六日

「歴史認識をめぐつて」

徐羅伐軍事研究所長 ソラボル 李錦學

「歴史認識をめぐる諸問題」

戦史部第一戦史研究室長 庄司潤一郎

三月七日

「比較戦史研究の意義」

戦史部長 徐羅伐軍事研究所長 ソラボル 李錦學

コメント

戦史部第一戦史研究室主任研究官 立川京一

△比較戦史研究会▽

「韓国軍事史編纂・研究の方向——」

韓国軍事史編纂研究所長 河平載

「テーマの選択——事実の究明のために——」

戦史部主任研究官 山村

健

三月八日

「実行と発信」

戦史部主任研究官 塚本 隆彦

コメント

徐羅伐軍事研究所長 李鍾載
韓國軍事史編纂研究所長 河平載

△戦争・戦略研究会▽

六月二十五日

「現代航空戦力の新側面」

米国ランド研究所上級研究員 ベンジャミン・ランベス

コメント

航空中央業務隊付一等空佐 渡邊至之

六月二十六日

「現代航空戦力の行使——湾岸とコソボ——」

米国ランド研究所上級研究員 ベンジャミン・ランベス

コメント

航空幕僚監部防衛部一等空佐 廣中雅之

「米国内航空戦力論議——ドクトリン論争——」

米国ランド研究所上級研究員 ベンジャミン・ランベス

コメント

三菱重工業顧問（元航空幕僚長） 石塚勲

△戦争・戦略研究会▽

八月十三日

「ローマ軍の戦争」

ロンドン大学教授 フィリップ・セイビン

コメント

第一研究部第一研究室助手 長尾雄一郎

八月十四日

「戦争の将来像」

ロンドン大学教授 フィリップ・セイビン

コメント

第一研究部第一研究室助手 塚本勝也

八月十五日

「空軍力」

ロンドン大学教授 フィリップ・セイビン

コメント

戦史部長 林吉永

◇各種研究会◇

三月二十三日

「明治海軍において皇族の果たした役割」

戦史研究家 石川泰志

三月二十六日

「日本海軍と造船業との関係に関する考察

——一九三〇年代を中心にして——」

光陵女子短期大学助教授

堅田義明

五月十日ほか

「戦史研究初学者教育」

上智大学名誉教授

三輪公忠

七月十八日ほか

「イギリス側より見た日英戦争指導史」ほか

玉川大学専任講師

等松春夫

八月一日

「国際政治における核兵器の意義」

一橋大学教授

納家政嗣

十月十六日

「日英同盟——その背景と影響——」

ロンドン大学名誉教授

イアン・ニッショウ

コメント

戦史部第一戦史研究室主任研究官

黒野耐

十月三十一日

「フランスにおける日本陸海軍関係史料」

横浜国立大学名誉教授

西堀昭

十一月三十日

「日露戦争研究の諸問題

——戦争勃発一〇〇周年に向けて——」

名城大学教授

稻葉千晴

二、戦史史料の閲覧

防衛研究所は旧陸海軍関係の公文書、非公文書及び戦史関係の出版物並びにそれらの複製物（以下、「史資料」という）を、平日九時から十六時三十分まで、図書館史料閲覧室において一般に公開している。

調査研究のため閲覧を希望する者は、所定の手続きをとつて誰でも閲覧することができる。

平成十三年の閲覧者総数は、四八九五名であった。

月別閲覧者数は左表の通りである。

閲覧者数	月	閲覧者数	月	閲覧者数	月	閲覧者数	月	閲覧者数
四七二	十	四一八	七	三九四	四	三六五	一	
三六八	十一	五一二	八	四二三	五	三八七	二	
三〇二	十二	四四一	九	四二八	六	三八六	三	

三、レンフアレンス

防衛研究所は、戦史部及び図書館史料室を窓口として、史資料の検索、特定史資料の内容に関する情報提供、史資料に関する参考文献及び専門的調査機関等に対する情報提供を行っている。レンフアレンス件数は、微減の傾向にあるが、本活動に対する礼状等が国内外から多数寄せられている。

昨年（平成十三年）のレンフアレンス統計は、左記の通りである。

（一）要求件数

総件数は、一六一七件であった。月別件数は左表の通りである。

要求件数	月	要求件数	月	要求件数	月	要求件数	月	要求件数
一四〇	十	一三九	七	一四七	四	一五〇	一	
一二六	十一	一七八	八	一四〇	五	一二七	二	
九五	十二	一一八	九	一四五	六	一一二	三	

(二) 要求者の職業

職業	要求件数								
防衛庁	一六八	大学等	一四八	図書館	二〇	研究家	三六	他官庁	一〇六
他官庁	一〇六	外国人	一一八	議員	一一	旧軍	二〇四	防衛庁	六〇〇
旧軍	二〇四	議員	一一	外国人	一一八	他官庁	一〇六	防衛庁	六〇〇

(三) 外国人

総件数は、一一八件であつた。

国	要求件数	国	要求件数	国	要求件数	国	要求件数	国	要求件数
アメリカ	六一	フィリピン	六	ドイツ	四	オーストラリア	三	南アフリカ	二
イギリス	一二	フランス	五	ロシア	三	トルコ	二	シンガポール	一
台湾	七	韓国	五	中國	三	オランダ	二	ルクセンブルグ	一

(四) 質問内容

質問内容	要求件数	質問内容	要求件数	質問内容	要求件数	質問内容	要求件数	質問内容	要求件数	質問内容	要求件数
戦争指導	四	個人歴	一九四	制度	九八	兵器	七〇	兵站補給	一〇	情報	六
作戦戦闘	一三二	制度	九八	服装記章	六	兵器	七〇	教育訓練	一一九	史料	四
部隊史	三二一	兵器	七〇	教範用語	一〇	兵站補給	三	自衛隊史	○	その他	五七六
その他の質問	二六	史料	一七三	研究開発	三	戦史叢書	一	その他の質問		その他の質問	

(六) 要求・回答手段

陸軍	七五六	要求手段	電話	要求件数
海軍	四九四	文書	三二〇	電話
共通	一六九	直接	四四四	文書
その他	一九八	FAX	四五	直接

(七) 回答時間

一時間以内	九六一	四時間以内	四四	十五時間以内	九
二時間以内	三九六	五時間以内	二九	二十四時間以内	三
三時間以内	一三三	十時間以内	三五	二十四時間以上	七

(五) 陸海軍別

四、見学者

平成十三年に当図書館史料庫を見学した主な見学者は、左記の通りである。

一月三十日	エヴァ・ルトコフスカ	ワルシャワ大学教授
二月二十七日	王 持明	中国国防大学教授
三月五日	ユルグ・ドウップラー	ドイツ国防省軍事史研究所長
五月八日	小和田 恒	日本国際問題研究所理事長
六月十八日	東京女子大学現代文化学部学生	一行二二名
十月三十一日	江 天石	中国社会科学学院近代史研究所教授
十一月三十一日	西堀 昭	横浜国立大学名誉教授
十一月八日	大濱 徹也	筑波大学名誉教授
十一月二十一日	藤井 昇三	電気通信大学名誉教授
十二月十四日	オーストラリア戦争記念館	一行四名
十二月二十日	青山学院大学国際政治経済学部学生	一行八名

名

(吉川秀明、河合正廣、立川京二)